

日本古典文學大系
17

源氏物語
四



岩波書店刊行

源氏物語四

日本古典文学大系 17

昭和 37 年 4 月 5 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 3 月 10 日 第 16 刷 発行

定価 2100 円

校 注 者 やま きし とく へい
 山 岸 徳 平

 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

 東 京 都 青 梅 市 根 ヶ 布 1-385
印 刷 者 白 井 倉 之 助

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 株 式 岩 波 書 店
 一 ツ 橋 2-5-5 会 社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

凡例	三
柏木	九
横笛	五
鈴蟲	七
夕霧	九
御法	二七
幻	一九
勾宮	二七
紅梅	三三
竹河	四九

凡 例

一、本書は、三条西実隆筆になる青表紙証本を底本とした。いわゆる三条西家証本の親本である。各巻本文冒頭の題名は、底本題箋の文字のままを、活字体として掲げた。

一、本書は、すべて底本に忠実なるを期したが、読解の便を考慮して、左の諸点にだけ手を加えた。

1 本文は正字を用い、歴史的仮名づかいに改めた。底本は、定家仮名づかいや、書写せられた時代の表音的な仮名づかいなどが多く交っている。

2 段落を分けるために改行もし、読解を容易にするために句読点・濁点等を施した。また仮名を漢字に改めて、仮名を振った所もある。従って、その漢字を省き、振り仮名を本文とすれば、大凡底本の姿を再現することができる。

例 本意 ほんい 折節 せつせつ 紙燭 しそく 内裏 うち

3 振り仮名の中には、() で囲んだものがある。それは、底本の漢字の読み方に、特別な習慣があるか、または人名や地名などを誤読しないようにと、校注者の付けたものである。

例 修法 しゆほふ 夕殿 せきでん 三月 みやづき

4 底本は、「内裏」の事を「うち」または「内」と記している。「うち」は2の例の如くであるが、「内」の場合は() 内に「裏」を補って、「内(裏)」に統一した。この(裏)は、底本にない事を示している。

5 底本の表記を改めたものは、第三冊までの凡例に掲げたものの外、「倍り↓侍り」「山と↓やまと」「もろ友↓もろ共」「す行↓経」「さか月↓さかづき」「上え↓浄え」「計↓許」「事わり↓ことわり」「玉↓魂」「さい将↓さい相」「殿る↓とのゐ」「大ばん所↓台ばん所」「返る↓帰る」などである。その他は、頭注でそれを断った。

6 底本の漢字中、語尾の表記されていない動詞には（ ）内に送り仮名を、また名詞には（ ）内に助詞を補ったものがある。ただし、「侍（終止形以外）・思・給・申」は、原則として、（ ）なしに補った。

例 行（く） 思ひ侍（り） 世（の）中 我（が）子

7 底本の「也」「成」「覧」「哉」「剣」「南」などは、断らずに、「なり」「らん」「かな」「けん」「なん」と改めた。

8 底本の「人々」「時々」は「人々」「時々」と改めた。また「きゝ給ふ」に漢字を宛てた時は「聞き給ふ」、「ものゝ」とのゝ」は「物の」^{もの}「殿の」^ととし、「悲しきこと」ゝて」の如く、「で区切られる場合は、「悲しきこと」と改めた。

9 底本の脱字や脱文は、青表紙本系の他本によって（ ）に入れて補った。

10 会話・独語・消息は別行とし、「」を付した。また、第三者の言葉、または思惟が含まれている場合は、「」^{『』}を用いてこれを区別した。

一、傍注は、主語及び他動詞の目的語、不完全な自動詞の補足語を主とし、接統詞その他の語の若干をも記して、表現面の、適確な理解の便に供することに努めた。傍注は、本文と同じく、歴史的仮名づかいと正字に従った。

一、頭注は、論理的に正確な、表現面の解釈を目標とし、意義学と文法学との面に多くの関心を用い、語釈の適確と、文法の正確とを期した。特に、助動詞と助詞に関しては、その取扱いが粗雑にならぬように留意した。やや廻りくど

いと感じられる頭注も、そのためである。主要なものは、補注にも多少述べておいたが、左の如き点に注意した。

1 「ぞ・こそ・なん」などは、多くの場合「どうも・如何にも」の如くに注し、省略しないように考慮した。

2 「けり」は、意識内容の時間、即ち内在時間に関係を持っている。内在時間は、ヤスバースやハイデッガーやワルテル、その他多くの哲学者や心理学者の論究もあり、その機能には分析すべき問題が少くない。補注はそれらの片鱗に触れたに過ぎないが、これを特に「：」にたっけ「：」にたっけなあ（よ）の如くに注した所もある。

3 接続助詞「て」の機能は補注に述べた如く、原因と接続の場合とを区別した。

4 格助詞「の」「が」の、指定格となっているものは、補注にも多少触れたが、頭注にはそれぞれ断っておいた。

5 他動詞の目的語、及び不完全自動詞の補足語に対する敬語に就いては、補注に多少触れたが、頭注にも断っておいた。目的語及び補足語の省略せられている場合が多いから、敬語の処置に惑わないためである。

6 自発即ち自然的可能の助動詞に関しても、頭注にそれぞれ断っておいた。

7 仮想の機能の「む」に関しても、頭注にそれぞれ断っておいた。

8 格助詞「を」は、時により「：」に対して」と注した。新古今集序の「いその上古き跡を恥づといへども」の「を」の類である。

9 その他、「連用修飾語」と「伝聞推測」という術語は、頭注中には用いなかった。

一、頭注には、一項目中に、二項目にわたるものの同居した部分が若干存在する。それは、見開き二頁に収容する必要上、その頁の項目数に従って、止むを得ず生じたものである。しかし、傍注と相まって、正確平易な読解に役立つようには努めた。頭注・補注は、現代仮名づかい・新字体を用いた。各節の初めに、その節の要旨をゴシックで示した。

一、頭注や補注には、河内本と別本（伝阿仏尼筆本）の文を掲げて、読解の参考に供した所もある。曰、目、目は、それぞれ、第一冊、第二冊、第三冊を示す。

一、補注は、頭注に収容し得なかった部分を、適宜に転置したもの、及び本文の理解に参考になると思われるものを掲げた。ただし、頁数の関係もあり、割愛した分は、他の巻で補足したいと思う。

一、付図は、本文の理解を助けるため、必要と認められるものを、由緒あるものから、それぞれ選出した。文法と語義と有職故実に通ずることは、解釈に不可欠な事である。これも割愛した分は、他の巻でも補足したいと思う。

一、校異には、この底本を基礎とし、湖月抄の本文以下、左の如き諸本との対校を表示した。

1 湖月抄本

2 吉田（幸一氏）本

3 穂久邇文庫本

4 蓬左文庫（尾張徳川家）本

5 書陵部本（後陽成帝宸筆を含む）

6 山岸（三条西公条）本

7 青蓮院門跡本

右は、いずれも江戸初期以前の書写にかかる。7は江戸時代の書写であっても、校訂に用いた原本は、どれも吉野朝から足利期の写本で、青表紙本としては、特に善本と認むべきものである。青表紙本には、江戸初期又はそれ以前のものとして、まだ、尾張徳川家蔵の里村紹巴筆本、智仁親王筆本や、京都府立図書館蔵の烏丸光広筆本や、嵯峨の大覚寺蔵本など、各所に存在する。然し、対校に当っては、量よりも質を重視して、右の如き江戸初期以前の書写本中、由緒ある範囲の一部に止めた。限られた紙面では止むを得ず、また同系でも玉石混合は無意味な故である。

一、校異の表は、本文研究上、重要と思われる項目だけを掲出し、紙数の関係上、大部分を割愛した。精細な表は、他日別に綜合して世に問う心算である。

一、諸本や付図に関して、それぞれの方面から多大の援助を仰いだ事は、末巻に纏めて謝意を表したいと思う。

源
氏
物
語

柏

木

書名 夕霧は、一条宮を訪問し、落葉宮に歌を贈った。落葉宮は「かしは木に葉守の神は
まさずとも人ならすべき宿のしづえか」と返した。この歌によった。
期間 源氏四十八歳の正月から秋まで。

期間 源氏四十八歳の正月から秋まで。

紫上：四十歳

女三宮：二十二、三歳

玉鬢：三十四歲

明石女御…二十歳

薰：一歳（誕生）

夕霧：二十七歳

柏木：三十二、三歳（死去）

内容 柏木の懊悩と他界である。柏木の病勢は思わしくない。けれども、女三宮を思いつめ、最後の消息を贈った。やがて、薫が誕生した。女三宮は、将来を悲観して出家した。柏木は、この出家を悲痛しつつ、間もなく他界した。その後、夕霧は落葉宮を吊問し、御息所母子に同情した。この同情も、いつか落葉宮思慕に変わった。

1 柏木の病勢悪化に、両親は心痛のあまり、葛城山の行者などまで招いて加持させた。

柏木は、女三宮の前途に同情して消息した。小侍従を通じて、その返事があった。

2 女三宮は薫を生んだ。源氏は喜ぶべきであるのに、女三宮に冷淡にならざるを得ない。

女三宮も心の鬼故に、出家志望を源氏に話した。

3 朱雀院は、女三宮の病氣を見舞い、源氏の反対を押し切り、受戒させた。女三宮の出

家は、六条御息所の物怪による。

4 夕霧は、柏木の意外な衰弱に驚き悲しんだ。柏木は、この見舞を喜んで、夕霧に遺言

もし、源氏への申訳をも依頼した。間もなく柏木は他界した。

5 薫の五十日の賀が、盛大に行われた。源氏の感慨は複雑であるが、薫を抱いて白桑天

の詩を思出した。又、女三宮と柏木との密事を夕霧にはめかした。

6 柏木の死後、落葉宮母子は寂しく過ごしている。夕霧は、その一条宮を訪問し、色々

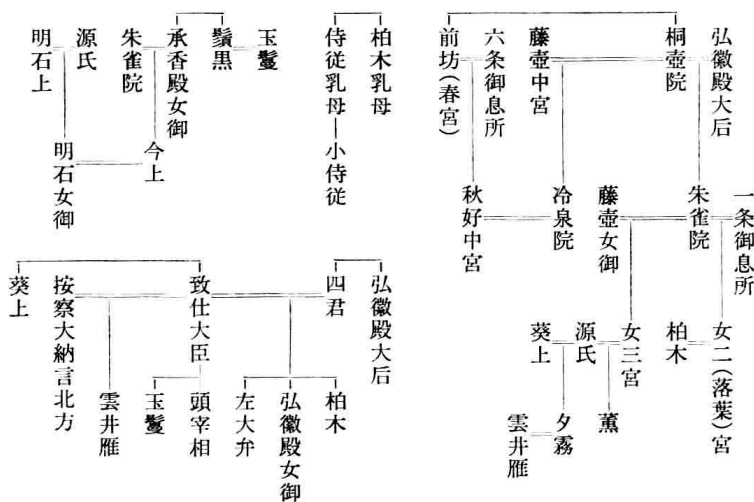
と懇談した。落葉宮と和歌の贈答もあった。

7 夕霧は、致仕大臣の邸を見舞った。致仕大臣は、見る影もなく寝ている。柏木の弟

の君達も、丁度集っていた。夕霧は落葉宮の母御息所の歌などを披露した。一同はしみ

じみと柏木の追憶をした。

8 四月頃、夕霧は一条宮を訪れた。夕霧は、落葉宮と和歌を贈答して、思慕の情をほの



一まだやっぱり。下の「おこたらで」にかかる。
二このような状態で、ずっと(のみ)悩みなさる事(病氣)が直らなくて、年も改った。源氏四十八歳。「かくのみ云々」は、「いとゞはかなき柑子などをだに云々」(四一八頁(若菜下))を指す。三「無理をしてまでこの世を離れ(捨てて)しまおう(死のう)と思う命が、離れがいてもなく、親に先だつ不孝の罪が重からう(軽々しく死んではならない)という事」を考え(保持)心は変らないが。四又、そうかと云 1 柏木の重態と煩悶中女三宮と贈答
つて、強いて(この世を)離れかね惜しんで、この世に留め置き(生き長らえ)たい自分の身であるか。(思う事も叶わぬ身故、この世に執着を持つ自分ではない。)五かつて幼少であった時から、思っている心(理想)は。大他の人に、もう一段(人並以上に)勝れよう。七公私の事に手を出しながら、かつては、並々ならず(氣位望み)を高くしていたけれども、「その氣持(理想)は、達し得ないのであったなあ」と。↓補注一。
八自分を、かつて見下げてしまつて無力な者と知つて自信を失つて(以来、九すべての世の中を、殊更に、面白くなくあえて考え、後生安樂の勤行のために、出家しようと言う志望が、深く積極的になつてしまつていたけれども。↓補注二。一〇出家した場合の、親達の御不満を考へるので。その考へが、親にでも重い邪魔になるであらうと、かつて考えずにはいられなかったから。↓補注三。二やっぱり、世間に立ち交る事ができそうにも思われな(苦惱が、一方だけでなく(女三宮への恋と、源氏に知られた事とが)。三誰がまあ、苦しいのか。(皆、自分の罪である。)

かしはぎ

衛門のかむの君、なほ、かくのみ悩み給ふ事、おこたらで、年もかへりぬ。
おとゞ・北の方おぼし嘆くさまを、見たてまつるに、「しひてかけ離れなん命の、かひなく、罪おもかるべきこと」を思ふ心は心として、又、あながちに、この世に、離れがたう惜しみとゞめまほしき身かは。いはけなかりし程より、思ふ心、高く、殊に、何事をも、「人に今一きざみはまさらむ」と、おほやけ。わたくしのことに觸れつゝ、なのめならず思ひのぼりしかど、「その心、かなひがたかりけり」と、ひとつ二つのふしごとくに、身を思ひ落してしこなた、なべての世(の)中、すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに、本意ふかく進みにしを、おやたちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれん道の、重きほだしなるべく、おぼえしかば、とぎまかうさまに、まぎらはしつゝ、過ぐしつるを。つひに、猶、世にたちまふべくもおぼえぬ物思ひの、一かたならず、身に添ひにたるは、我よりほかに、誰かはつらき。心づから、もてそなひつるにこそ」と思ふに、

一仏をも神をも、恨みかこつ(悪く)思つて不平
 を持つ)ような方法がないのは。二どうも当然、
 そうあるべき(恨みかこつ)方法のない)はずで、
 前世の運命ではあろう。三千年も枯れぬ松でな
 い生涯(世)は、命に限りがあるもので、結局、こ
 の世に生き残る事ができるものでもないから。
 ↓補注四。四世間の人にもこのように(柏木は、
 女三宮に恋い焦がれて死んだと)少しは思い出
 されるに相違ない間に死に、仮初の同情でも、
 その死に対して御掛けなさるような人(女三宮)
 が、あるとする場合には、それをこそあ。
 五自分(柏木)は、向う見ずの一途の恋の思いの
 火に。↓補注五。六あつてはいけない、不都合
 な浮名がまあ立ち、自分(柏木)にも女三宮にも
 容易ならぬ面倒な煩悶が、発生するような事
 あるかも知れない、それよりは寧ろ、死んでし
 まえば、「無礼である」と、自分に心を隔て(憎
 み疎んじ)なさるような方面(源氏)におかれ
 ても。↓補注六。七たういそうである心を隔て
 なさる)としても、死に免じて、無礼の罪は考
 え許して御しまいなさるであらうなあ。八今は
 これまでという(臨終)の際には。九別に又、女
 三宮の一件以外に、格別の過失が、これと言
 つて無いから、死んだらば、生前の長い間、源
 氏が、何かのあら折ごとには、かつては、自分
 (柏木)を附き纏わせて、親しく馴れなされた方
 面の同情も。〇返す返す(いくら考えた所で、
 全く詰らない事である。二)どうして、自分
 (柏木)はこんなに、敢えて(殊更に)身の置き所
 もなく(肩身を狭く)してしまつた身であらう
 か」と、心を暗やみにし。三枕も浮いてしま
 う程、悩んで泣いて、人事ならず(自ら招いて)
 泣く上に、涙まで流し添えておりながら。下の
 「御文たてまつれ給ふ」に続く。三最後になッ

うらむべき人もなし。佛・神をも、かこたんかたなきは、これみな、さるべき
 にこそはあらめ。たれも、千年の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬ
 を、かく、人にも、すこしうち忍ばれぬべき程にて、なげのあはれをもかけ給
 はむ人のあらむにこそは、一つ思ひに燃えぬるしにはせめ。せめて、なが
 らへば、おのづから、あるまじき名をも立ち、我も人も、やすからぬ亂れ、出
 (で)くるやうもあらむよりは、「なめし」と、心置い給はんあたりにも、さりと
 も、おぼし許いてんかし。よろづのこと、今はのとぢめには、みな、消えぬべ
 きわざなり。又、ことざまの過ちし無ければ、年ごろ、物の折節ごとには、ま
 つはしならひ給ひしかたのあはれも、出で來なん」など、つれづれに、思ひ續
 くるも、うちかへし、いと、あぢきなし。など、かく、程もなくしなしつる
 身ならむ」と、かきくらし、思ひ亂れて、枕も浮きぬばかり、人やりならず、
 ながし添へつゝ、いさゝか、ひまありとて、人々の、たち去り給へるほどに、
 「女三方」
 かしこに、御文たてまつれ給ふ。
 柏文「いまは、かぎりになりにて侍る有様は、おのづから、聞し召すやうも侍
 らむを。「いかゞなりぬる」とだに、御耳とゞめさせ給はぬも、ことわりなれ
 ど、いと、憂くも侍るかな」

てしまっている様子は。四「せめて、「容態はいかが相なつたか」とだけでも、御身が耳に御留め(御氣に掛けて)下さらぬもの。五「思う事もみな、柏木は書き残して止めて。六「今は最後であると言って、たとい私が燃えなくてもその火葬の煙も、こんぐらかつて解けないように、御身への絶えない(諦めきれない)私の思慕の情は、やっぱり消えずに残る事であらうか。七「せめて「可哀そうである」と言うだけでも、私に仰せ下されよ。然らば、その一言を、心を静めて、私が人ごとでなく、自分から闇に迷う冥途の道の光明にも致しよう。八「懲りもしないで、しみじみとしたような事柄などを。九「私自身も対面して。三「子供の中から、そのような(柏木に対面する)機会があるので。小侍従の母なる侍従乳母の姉は、柏木の乳母であった。その関係で、幼時、柏木にも対面する折があった。三「柏木を見馴れ申しあげたものであるから。三「柏木の、女三宮に対する身分不相応な(大それた)料簡(心)だけは、どうも甚だしく不快と、自然に思われるのであったけれども↓補注七。三「今や、将に死のうとしてゐる」と聞く事は。四「この御返事(でござりまする)がなあ。偽りなく真実に、これ(この御返事)を御書きなされよ。これがいかにも、御返事の最後でもござりましょう。五「(柏木の心情にも)通りの同情(気の毒さ)だけは。六「憂い(つらい事)と、密事露見のため、かつて懲り懲りと考えてしまったから、(今更返事など書く事は)本当にどうも、気のりがしない(気が引ける)。七「御思慮(意志)や御性質が、物に動ぜず重々しく、どっしり(づしやか)してはいないけれども、今は、気恥ずかしいような源氏の御様子で(の)。

柏木

など、きこゆるに、いみじうわなへけば、思ふ事も、みな書きさして、

柏文「いまはとて燃えん煙もむすば、れたえぬ思ひのなほや残らん

「あはれ」とだに、の給はせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまよはむ道

の光にも、し侍らむ」

と、きこえ給ふ。侍従にも、こりずまに、あはれげなることども、いひおこせ

給へり。

柏文「身づから、いま一度、いふべきことなん」

と、の給へれば、このひとつも、童より、さるたよりありて、まゐり通ひつゝ、

見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心のみこそ、うたておぼえ給へつ

れ、今は」と聞くは、いと悲しくて、泣くく、

小侍従「この御返し。まことに、これを。とちめにもこそ侍れ」

と、きこゆれば、

女三「我も、今日か明日かの心ちして、物心細ければ、おほかたのあはればか

りは、思ひ知らるれど、いと、こゝろ憂き事」と、思ひ懲りにしかば、いみ

じうなん、つゝましき」

とて、更に書い給はず。御心・本性の、おもくづしやかなるにはあらねど、恥

一時々、柏木の事を直接(まほ)表面からではなく(それとなしに掠めて)仰せられる事が、女三宮には。三「葛城山の修験道場から招請して下山させた者を御待ち受けなされて、それらをして柏木に祈禱(加持)をせよとなさる。↓補注八。四御修法は、密法即ち天台・真言で祈禱を修すること、それを葛城山の聖が勤めるのである。↓補注九。五外の人の勧めで言うのに従って、効験のある聖者と言われるような修験者などで。六憎らしく、氣にくわない山伏どもまでも。山伏は奥山に起き臥して修行する僧。七声を出してばかり。「音を泣く」の「を」は、自動詞に添うて、その動作の起る場所などを現わす格助詞。下の「陰陽師」は、補注一〇参照。八「女人の怨霊である」とだけ、柏木の病氣の原因を占い申すのであるから。怨霊には、生きている人の生(む)霊と、死んだ人の死霊とがある。ここは、女三宮の生霊をさしている。九御思ひ悩み(思案にあまつて迷方にくれ)なされて、(少しでも効験のある験者と思ひ)こんな葛城山などの奥の奥をも、御さがし求めなさるのであった。二〇「けにく、心づきな山伏」も来たが、葛城の聖も、身長が高々として、目つき(まなざし)が氣味悪げで恐しくて、荒っぽく大声で。「つめたまし」は、「つめたし」に關係ある語かとも言う。従って冷酷などの解もある。二陀羅尼は、梵音で読誦する呪である。三「いやもう、ああ、いやな事であるなあ。三静かにそつと抜け出て。四「そう(柏木がそつと抜け出した)とも御存じなくて。五「休んで(寝て)いる」と女房達をして父致仕大臣に申させなさるから、致仕大臣は、そう(休んでい

づかしげなる御氣色の、折く、まほならぬが、いと、恐ろしう、わびしきなるべし。御覧などまかなひて、責め聞ゆれば、しぶくんに書い給ふを、とりて、忍(び)て、宵のまぎれに、かしこにまゐりぬ。

〔致仕大〕おとゞは、「かしこき行ひ人」とて、葛城山より請じおろしたる、待ちいで給ひて、加持まゐらせむとし給ふ。御修法・讀經なども、いと、おどろくしう

騒ぎたり。人の申すまゝに、さまく、聖だつ験者などの、をさく世にも聞えず、山に籠りたるなどをも、おとうとのきみだちをつかはして、召すに、け

にく、心づきな山伏どもなども、いと多くまゐる。わづらひ給ふさまの、そこはかとなく、物を心細げに思ひて、音をのみ、時々、泣き給ふを、陰陽師

なども、おほくは、「女の霊」とのみ、うらなひ申しければ、「さることもや」とおぼせど、さらに物の怪の現れ出(で)くるもなきに、おもしろ煩ひて、かゝ

る限くをも、たづね給ふなりけり。このひじりも、たけ高やかに、まぶし、つべたましくて、荒らかにおどろくしくて、陀羅尼讀むを、

柏(三)いで、あな憎や罪の深き身にやあらむ。陀羅尼のこゑの高きは、いと、けおそろしうて、いよく、死ぬべくこそおぼゆれ」

とて、やをら、すべり出で、この侍従と語らひ給ふ。おとゞは、さも知り給